

特 別 跡 名護屋城跡並びに陣跡 5

—加藤嘉明陣跡発掘調査概報—

1990年

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第99集

特 別 史 跡 名護屋城跡並びに陣跡 5

——加藤嘉明陣跡発掘調査概報——

1990年

佐賀県教育委員会

序

文禄・慶長の役（1592～1598年）に際して、玄界灘に面する東松浦半島一帯に構築された名護屋城と諸大名の陣屋の跡は、その多くが400年を経過した今も良好な状態で残存しており、名護屋城跡と17の陣跡が特別史跡に指定されています。

本県では、この壮大な遺跡群の保存と活用のため、昭和51年度から保存整備事業に取組んでおり、これまで豊臣秀保陣跡・堀秀治陣跡の発掘調査や環境整備を実施してきました。しかし本事業の促進を望む声が高まり、昭和60年度に「名護屋城跡並びに陣跡保存整備計画」を策定し本事業の一層の充実を図るとともに、日本と朝鮮半島との交流に暗い影を落としたこの戦乱の反省のうえに立ち、今後の両国の理解と交流を目的とした「佐賀県立名護屋城跡資料館（仮称）」の建設に向け準備を進めているところです。

この報告書は、呼子町における最初の整備事業として昭和63年度に発掘調査を実施した加藤嘉明陣跡の概要報告書です。加藤嘉明は伊予松山城主として著名であり、この陣跡も平成3年度までに整備され、遺跡公園に生まれ变ります。

「名護屋城跡並びに陣跡」は広い地域に点在しているため、地域開発との調整等問題は多々ありますが、地元町・関係機関等の御協力、文化庁・保存整備委員会の御指導・御助言を得て、今後とも本事業の促進に努める所存です。今後ともよろしくお願ひいたします。

なお、今回の調査に御協力をいただいた呼子町殿ノ浦地区の方々をはじめ、関係各位の御援助と御配慮に対し、深く感謝いたします。

平成2年3月

佐賀県教育委員会

教育長 志岐常文

例　　言

1. 本書は、昭和63年度・平成元年度国庫補助金の交付を受けて実施した「特別史跡名護屋城跡並びに陣跡発掘調査事業」に係る加藤嘉明陣跡の発掘調査概報である。
2. 本書の作成にあたっては、昭和57年度呼子町教育委員会が実施した「辻遺跡－加藤嘉明陣跡－」の発掘調査成果の一部を呼子町教育委員会の協力により借用した。
3. 本書の作成・編集は中山芳子・明瀬たまみ・山本りえ・松尾法博の協力を得て西田和己が行った。

本文目次

I	調査の経過と概要	1
1.	調査の経過	1
2.	周辺の環境	3
3.	調査の組織	5
II	遺跡の概要	6
1.	立地と遺構	6
2.	遺構の概要	9
(1)	曲輪	9
(2)	井戸跡	15
(3)	その他	16
III	小結	17

挿図・図版目次

Fig. 1	加藤嘉明陣跡周辺主要遺跡分布図	2	PL. 5	加藤嘉明陣跡調査区全景(南東より)	8
2	地形測量図	4	6	曲輪Ⅱ全景	11
3	遺構配置図	7	7	近景(北より)	11
4	曲輪Ⅱ遺構実測図	10	8	曲輪Ⅲ全景(南東より)	12
5	曲輪Ⅲ石垣実測図	13	9	曲輪Ⅳ全景(西より)	12
6	井戸跡実測図	15	10	曲輪Ⅳ・曲輪Ⅴ周辺	14
PL. 1	加藤嘉明陣跡全景(南東より)	1	11	井戸跡全景(南より)	15
2	名護屋城跡遠景(加藤陣より)	3	12	集石1	16
3	徳川家康別陣跡(加藤陣より)	3	13	遺状遺構(南東より)	16
4	加藤嘉明陣跡調査区全景	8	14	石組み溝(南より)	16
			15	M地点(加藤陣より)	16

I 調査の経過と概要

1. 調査の経過

文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱 1592～1598年）に際し、その本営地となった東松浦半島北部には、豊臣秀吉の居城である名護屋城を中心に、半径3Kmほどの圏内に全国諸大名の陣屋が120ヶ所以上も築かれていた。およそ400年を経過した現在もそれらの遺構が良好な状態で残存している。

本県教育委員会では、この類まれな遺跡群の保存と活用のため、文化庁・保存整備委員会の指導・助言を受け、昭和51年度から「名護屋城跡並びに陣跡保存整備事業」を実施している。今回調査を行った加藤嘉明陣跡は、昭和51年度の陣跡分布調査によりNo.100陣跡として周知されていた。しかし、昭和56年度に県営土地改良農道整備事業の一つとして呼子町殿ノ浦地区と加部島を結ぶ加部島架橋（呼子大橋）の計画がなされ、しかも陣跡の中心部を壊断することになっていたため、陣跡の保存と架橋計画実現のための協議が重ねられた。その結果、設計の変更を行い、道路の中心線を西側へ約40m移動し、陣の主要な部分があったと推定される尾根東側を保存することになった。保存地域については追加指定の作業を進め、道路敷部分は昭和57年度に呼子町教育委員会が発掘調査を実施し記録保存された。なお、本陣跡は昭和62年12月25日に呼子町の毛利秀頼陣跡・玄海町の木下利房陣跡・長谷川秀一陣跡と共に追加指定された。昭和60年には保存整備事業の一層の促進を図るために「名護屋城跡並びに陣跡保存整備計画」を策定し、加藤嘉明陣跡を呼子町における最初の整備対象陣跡として取り上げた。昭和62年度に呼子町により史跡の公有化がなされたこともあり、発掘調査は昭和63年8月から陣跡内の遺構の配置・残存状況を把握することを目的として、平成元年3月まで行った。調査の結果、建物跡は確認できなかったが、曲輪の配置状況や石垣等から、これまで発掘調査を実施してきた豊臣秀保陣跡・堀秀治陣跡等とは異なる陣屋の様子を明らかにすることができた。なお、本陣跡の環境整備は発掘調査の成果を基に、平成3年度までに終了する予定である。



註 多々良友博 「辻遺跡—加藤嘉明陣跡—」
呼子町教育委員会 昭和58年

PL.1 加藤嘉明陣跡全景（南東より）



Fig. 1 加藤嘉明陣跡周辺主要遺跡分布図 (S = 1 / 50,000)

- | | | | |
|----------|---------------|-----------|------------|
| 1 鶴塚 | 11 德川家康陣跡（別陣） | 21 後田遺跡 | 31 堀秀治陣跡 |
| 2 御手洗古墳 | 12 聖板安治陣跡 | 22 生駒親正陣跡 | 32 片桐且元陣跡 |
| 3 鬼ノ口古墳 | 13 来島通之陣跡 | 23 佐竹義宣陣跡 | 33 古田重然陣跡 |
| 4 平竹石塚 | 14 藤堂高虎陣跡 | 24 烏津義弘陣跡 | 34 木下延俊陣跡 |
| 5 大友遺跡 | 15 伊達政宗陣跡 | 25 上杉景勝陣跡 | 35 名護屋城跡 |
| 6 尾ノ上古墳群 | 16 黒田長政陣跡 | 26 九鬼嘉隆陣跡 | 36 德川家康陣跡 |
| 7 松尾田古墳群 | 17 毛利秀頼陣跡 | 27 加藤清正陣跡 | 37 小西行長陣跡 |
| 8 加藤嘉明陣跡 | 18 早川長政陣跡 | 28 福島正則陣跡 | 38 前田利家陣跡 |
| 9 M地点 | 19 須主不明陣跡 | 29 豊臣秀保陣跡 | 39 木下利房陣跡 |
| 10 宗義智陣跡 | 20 山城遺跡 | 30 鍋島直茂陣跡 | 40 長谷川秀一陣跡 |

2. 周辺の環境

名護屋城跡並びに陣跡は、佐賀県の北西部、玄界灘に面した東松浦半島北端の鎮西町・呼子町・玄海町に点在する。東松浦半島は、玄武岩質溶岩に厚く覆われた広大な台地であり、東は唐津市、南は伊万里市的一部分まで含み、「上場台地」と呼ばれている。この半島の西及び北側は突出した岬と複雑な湾入をもつリアス式海岸であり、天然の良港となっている。また、この地は壱岐・対馬を経て朝鮮半島に近く、一衣帶水をへだてて古代より文化流入の玄関口となっていた。

上場台地では、旧石器～繩文時代の遺跡が全体的に分布し、その数は600ヶ所を超える。この地域における遺跡数の大半を占めている。このことは各陣屋の調査において、比較的多くの石器類が出土することからも窺い知ること

ができる。弥生～古墳時代になると、松浦川の注ぎ込む唐津湾沿岸にその中心は移るが、加藤嘉明陣跡の所在する呼子町においては、弥生時代前期～後期の砂丘埋葬遺跡であり西北九州型弥生人の人骨が出土したことで知られる大友遺跡や加部島の横穴式石室を内部主体とする6世紀後半の瓢塚前方後円墳、6世紀後半～末頃に築造された御手洗・鬼ノ口古墳、加藤陣と同じ殿ノ浦にある6世紀末の松尾田古墳群等が調査されている。

しかし、これ以降は文禄・慶長の役に係る陣跡の調査まで考古学的には明らかにされていない。ただ平安時代末期から戦国時代まで存在した松浦党と称される武士団の様子が「有浦家文書」等により知ることができ、殿ノ浦の北端部には呼子殿館跡と伝えられる場所があり、「呼子殿神靈社」と刻字した石碑が残っている。

陣跡約120ヶ所のうち、呼子町内に比定されているものは9ヶ所あるが、この他にM地点、N地点の2ヶ所があげられる。また



PL. 2 名護屋城跡遠景（加藤陣より）



PL. 3 德川家康別陣跡（加藤陣より）

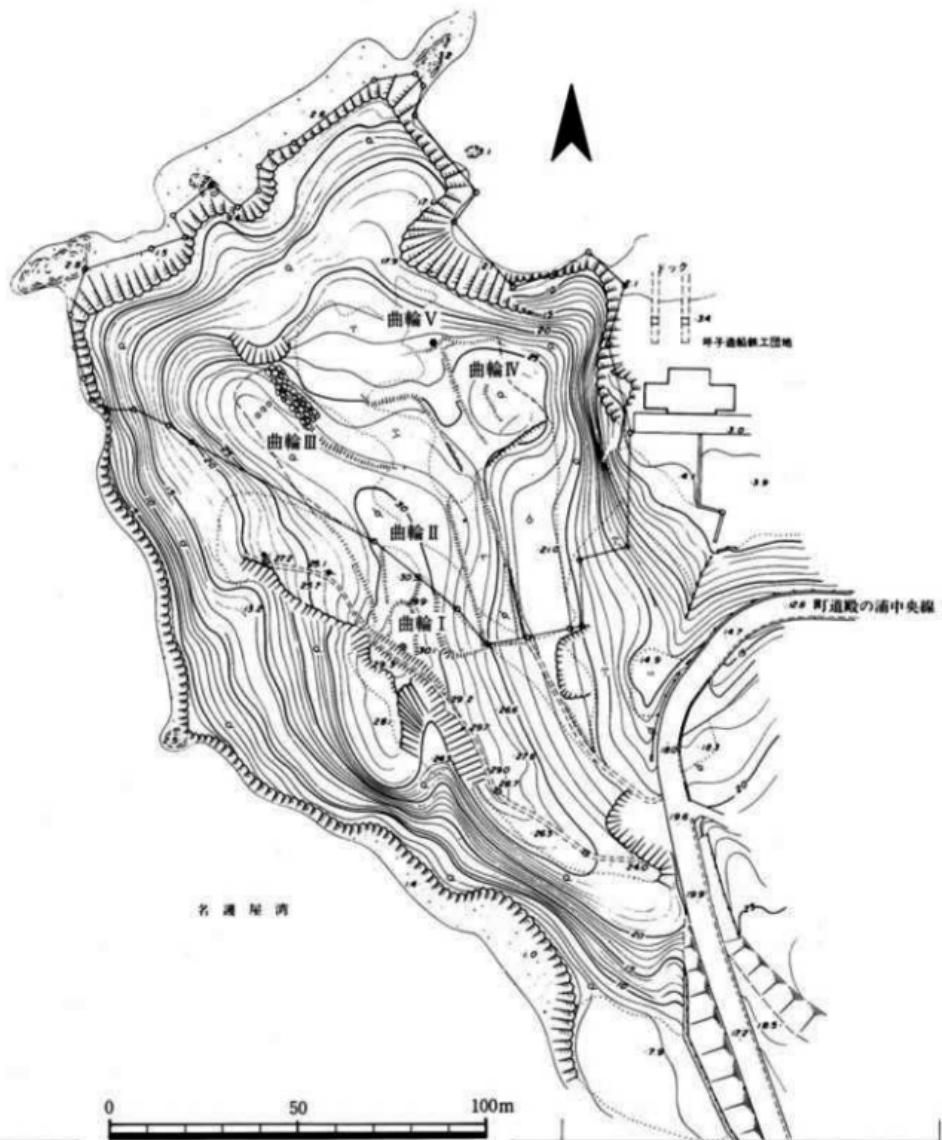


Fig.2 加藤嘉明陣跡地形測量図 ($S = 1/1,500$)

地形的に見て同じ連続した台地面にある鎮西町横竹にも陣跡が5ヶ所あり、この地域には16ヶ所の陣跡が知られている。このうち特別史跡は黒田長政・毛利秀頼・加藤嘉明・徳川家康別陣（平成元年3月答申）の4陣跡である。また、山城遺跡・後田遺跡・辻遺跡（加藤嘉明陣跡）・來島通之陣跡では、記録保存のための発掘調査が行われている。この他殿ノ浦地区において農業基盤整備事業に伴う確認調査を宗義智・脇坂安治陣跡等で実施し、M地点では敷石遺構を検出している。

註

1. 藤田等・東中川忠美『大友遺跡』呼子町教育委員会 昭和56年
2. 昭和47年佐賀大学考古学研究会調査
3. 松尾法博『御手洗古墳・鬼ノ口古墳』呼子町教育委員会 昭和60年
4. 東中川忠美『松尾田古墳群』呼子町教育委員会 昭和63年
5. 多々良友博『山城遺跡調査概要』『後田遺跡』 鎮西町教育委員会 昭和58年
6. 多々良友博『後田遺跡』 鎮西町教育委員会 昭和58年
7. 多々良友博『辻遺跡－加藤嘉明陣跡－』呼子町教育委員会 昭和58年
8. 昭和63年度呼子町教育委員会が実施
9. 昭和62年度佐賀県教育委員会が実施

3. 調査の組織（昭和63年度）

調査主体 佐賀県教育委員会

調査事務局

総括 武藤佐久二 県文化課長

大坪英樹 ☐ 課長補佐

庶務 植富安徳 ☐ 庶務係長

鶴田明美 ☐ 主事

直塚清純 ☐ ☐

本山恵悟 ☐ ☐

調査 高島忠平 名護屋城跡調査研究室長

森醇一朗 ☐ 専門員

立石泰久 ☐ 文化財保護主事

西田和己 ☐ ☐

松尾法博 ☐ ☐

五島昌也 ☐ ☐

山口久範 ☐ 指導主事

II 遺跡の概要

1. 立地と遺構

加藤嘉明陣跡は呼子町大字殿ノ浦字辻に位置する。殿ノ浦地区北部の標高約45mの台地（M地点）から、標高20mの鞍部をへて、さらに北西へ約250m岬状に伸びる標高31mの丘陵上に陣は築かれている。東は呼子浦、西は名護屋浦、北は約500mの距離で加部島があり、この間に弁天島が浮かぶ、三方の海を見わたすことのできる要所である。この丘陵は、南東から北西へゆるやかに湾曲する標高31～27mの尾根と尾根東側にある標高26mの小丘陵により構成されている。M地点と鞍部で連続する他は15～5mの高い崖で海へと続いている。尾根や小丘陵から崖まではかなり強い傾斜をもつが、丘陵北端部への岩場に向かってはややゆるやかとなっている。

遺構は、尾根上の31～27mの平坦面、東側小丘陵の標高26～24mの平坦面、小丘陵西側の標高20m前後の平坦面に曲輪を配している。昭和57年度の調査では、尾根上の曲輪をI～IV、東側丘陵一帯を曲輪E-1～4に設定されたが、今回の調査により曲輪名称を一部変更した。曲輪I・IIはそのまま踏襲したが、曲輪IVを曲輪IIIに、東側小丘陵一帯を曲輪E-1～4から曲輪IVとVに変更した。曲輪I及び曲輪IIの一部は呼子大橋の建設により、昭和57年度の調査後消滅している。曲輪Iは、この丘陵では標高31mと最も高所にあり、7×13mの広さをもつが明確な遺構は検出されていない。今回の調査では曲輪IIの続き、曲輪III～V、曲輪IIと曲輪IVの中間鞍部（通路状部分）、曲輪Vから北西海岸にかけての斜面を中心に行っている。曲輪IIは、標高30～29mで平坦面を造り、北側はゆるやかに傾斜し曲輪IIIへ続くが曲輪の境は明確ではない。曲輪II東側は高さ1mで落ち、明確な段をなすが、西側は自然地形を利用している。曲輪IIIは標高27mの尾根北西端に位置し、この陣跡内では最もはっきりとした曲輪である。北東及び北西側を石垣で、南西側は土塁により区画されている。曲輪IVは丘陵の東側に位置し、2段の平坦面からなる。上段は標高が26mあり、東端に土壘状の高まりがある。下段は上段との比高差が0.5mあり、西側及び南側に帶曲輪状にとりつくが、北及び東側は自然傾斜である。曲輪IVの西側、尾根との中間に幅約9m、長さ約33mの通路状の細長い面があり、南から北へゆるやかに下っている。この面のトレンチでは、直徑3cm前後の玉石が散乱した状態で出土しており、通路としての利用が推測されるが、東側の石垣は新しく後世に拡幅された可能性が強い。曲輪Vは丘陵の最も北側に位置する標高20m前後の平坦面にある。この曲輪南側に井戸跡が配され、陣跡における井戸跡の調査は初例である。曲輪Vの北側標高17mの平坦地で溝状遺構を検出し、この北側斜面で海への通路確認のためトレンチを入れたが、通路としての明確な遺構は検出できなかった。

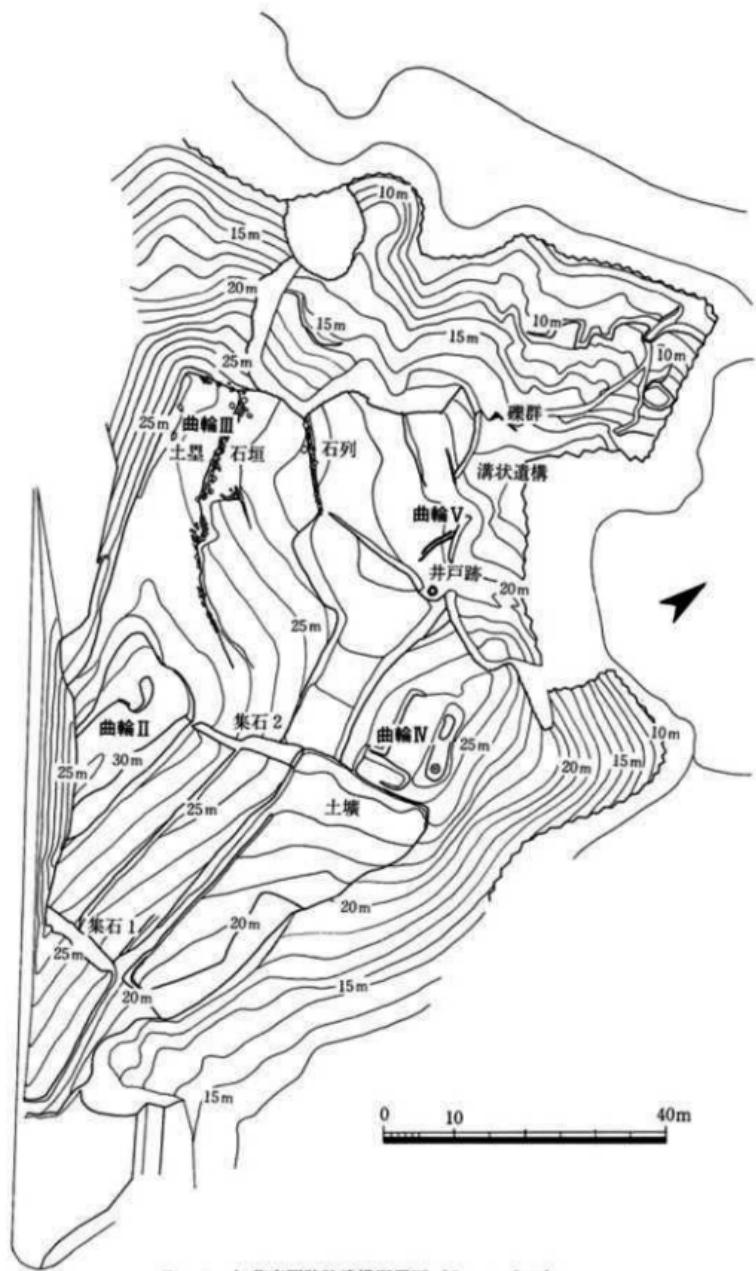


Fig. 3 加藤嘉明陣跡遺構配置図 ($S = 1/750$)



PL.4 加藤嘉明陣跡調査区全景



PL.5 加藤嘉明陣跡調査区全景（南東より）

2. 造構の概要

(1) 曲輪

曲輪Ⅱ (Fig. 4) は、南側を削平されており、残存する部分は南北約30m、東西約15mの南北に伸びる曲輪である。標高29mのラインが曲輪の輪郭線とほぼ一致するが、北側はゆるやかに傾斜しており曲輪の境は明瞭でない。曲輪南部での横断図 (A-B) を見ると、東側で標高30mの平坦面から0.5m下がった幅4mの細長いテラスをもち、2段である。しかしこの段も北へ行くにつれ不明瞭になっている。曲輪東端は直線的に区画され、その東側は1mの高低差がある。曲輪全体にこぶし大の礫を検出したが、特に東端から幅2~3m内に集中している。曲輪中央の礫群は地山上にあるが、東側では黒褐色土とまじっており人為的に配されたことがうかがえる。曲輪Ⅱ東側の約8m下がった道沿いに新しく積み直した石垣があることから、この集石は石垣の裏栗石の可能性が高く、石垣は撤去され裏栗石のみ残ったものと推測される。曲輪Ⅱでは、この他平石を数個検出しているのみである。

曲輪Ⅲは、尾根の北西端に位置する。曲輪の三方は石垣と土塁により区画されているが、曲輪Ⅱ側へはゆるやかに上っている。曲輪先端から南東へ約20mまでは幅が10mあり、両側の石垣・土塁も直線的に伸びている。しかし、この地点で土塁は消え、石垣は石材も小ぶりとなり東へ湾曲していく。石垣というより石列の感が強く、長さは約25mある。曲輪の区画を意識しているのは先端から約20mまでのようである。土塁は、曲輪の南西端にあり、長さが22m、残りの良い所で幅が1.5m、高さ0.5m程、断面は半円形である。曲輪先端では不連続だが、石垣の残存と考えられる石材を10数個検出している。北東側石垣 (Fig. 5) は、自然石を使い構築しているが、後世の攪乱を受け面が不揃いである。裏栗石は残っている部分で幅1m程であり、全体的に薄い。これは曲輪内の攪乱が石垣側で激しく、飛ばされたものであろう。石垣の外側は2mの高低差があり、標高24~23mの平坦面へと続いている。この平坦面にはば東西方向で、長さ16mの石列があるが、陣跡構築時のものではないようである。曲輪Ⅲは、区画は整然としているが、建物等の施設は検出できなかった。

曲輪Ⅳは、尾根東側の小丘陵上にある。この曲輪は2段の平坦面をもち、上段は南北15m、東西6mの広さである。この東端には土塁状の高まりが、長さ約12m、幅2~3mで南北に伸びている。北側が残存状況が良く、高さは0.8mある。土層断面では、明確な盛土層は認められないが、下部は玄武岩の地山であり、地山の高さが曲輪平坦面より高いことから、地山整形により平坦面を造り出していることがわかる。平坦面との境目では径が10cm前後と大きめの玉石を20個以上検出し、平坦面では径が3cm前後の玉石が点在するがその密度は極めて低い。下段は、上段との比高差が0.5mあり、西側及び南側に平坦面が見られる。下段においては、西側部分で南北幅4mのトレンチによる調査を行った。下段の幅は5.5~6mあり、西側へゆ

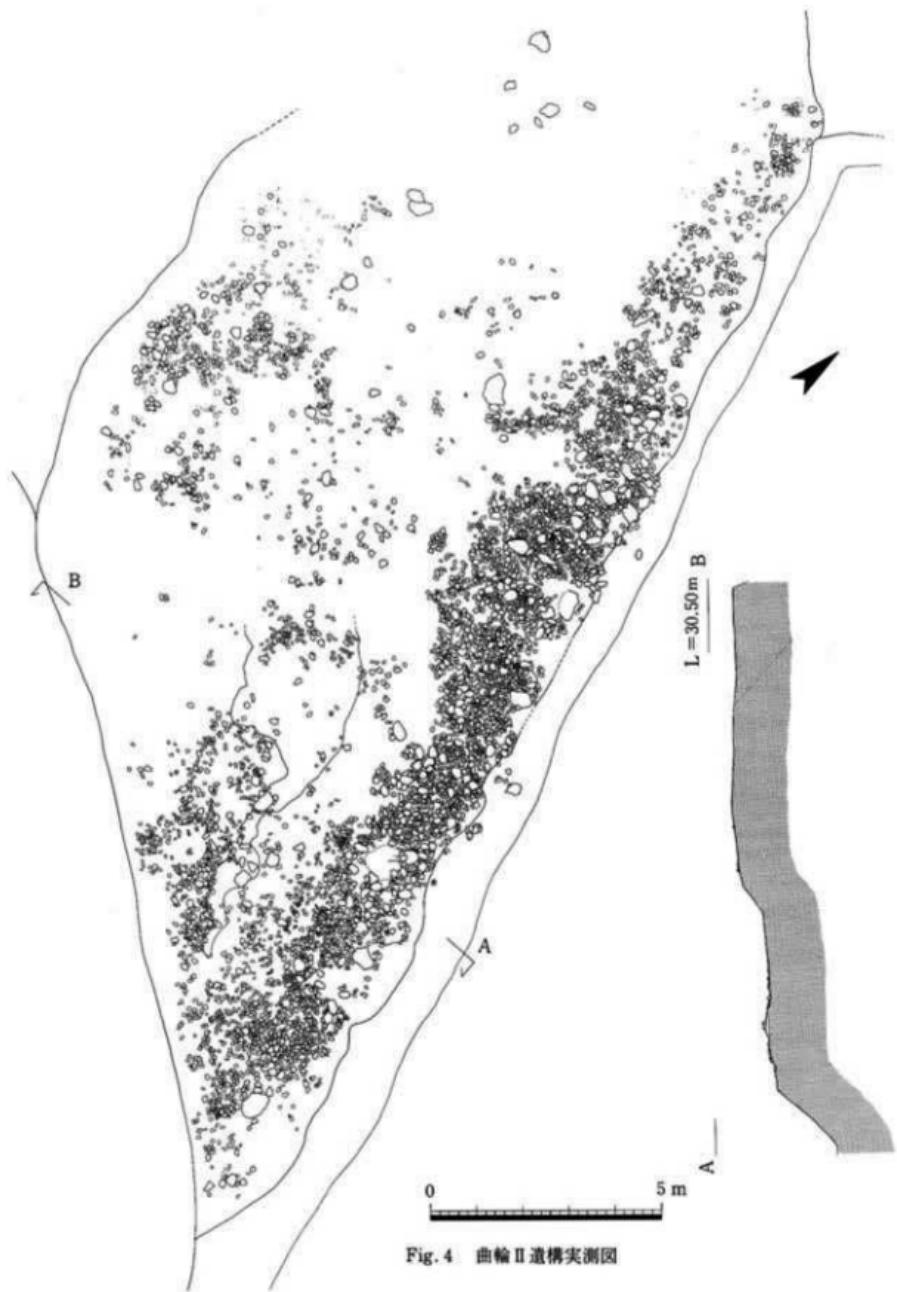
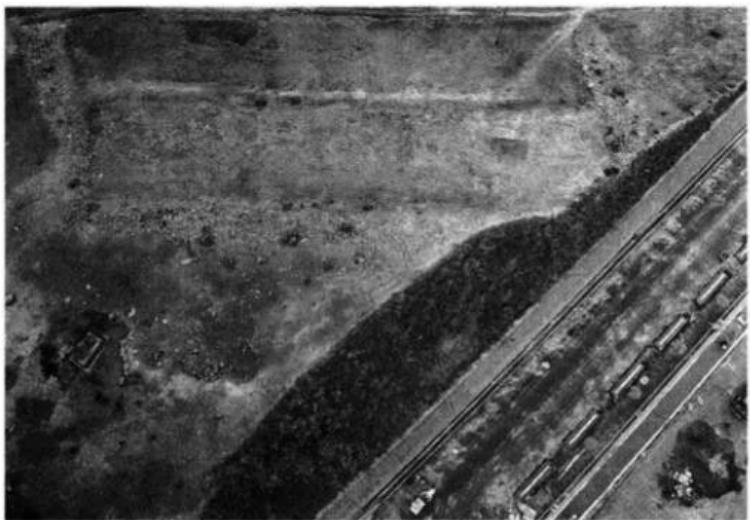


Fig. 4 曲輪 II 遺構実測図



PL. 6 曲輪II全景



PL. 7 曲輪II近景（北より）



PL. 8 曲輪Ⅲ全景（南東より）



PL. 9 曲輪Ⅳ全景（西より）

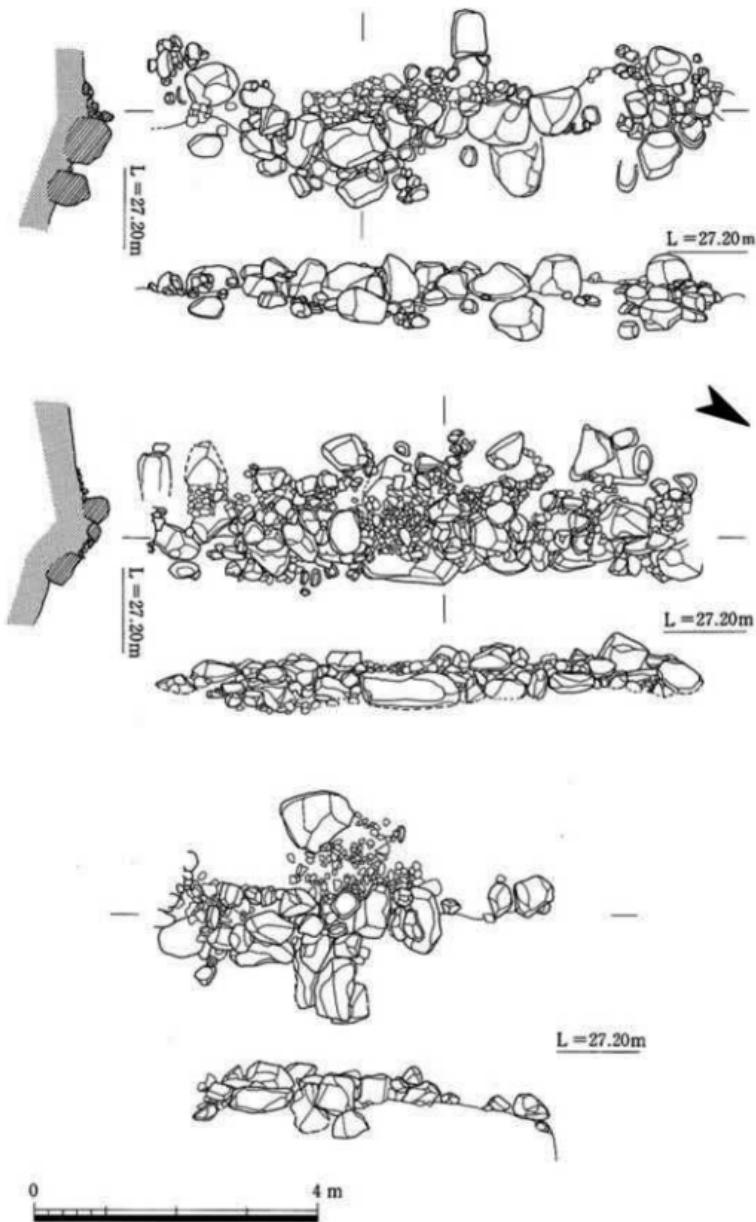


Fig. 5 曲輪Ⅲ石垣実測図



PL.10 曲輪IV・曲輪V周辺

るやかに下り、通路部分へは0.5mの高低差で続く。このトレンチ全体で径3cm前後の玉石が検出され、密度は最も高い。

曲輪Vは、曲輪IVの北西下標高20m前後の平坦面である。長さ約16m、幅約8mで北西方向に向いている。曲輪Vの東側は地滑りにより一段下がっている。井戸跡は曲輪南東隅、東側小丘陵裾部の人目につきにくい位置にある。曲輪中央には、南北方向の人頭大の自然石を利用した石組み溝があり、溝の長さは16.5m、幅は0.4m、深さは0.2mと1石分の深さでしかない。この石組み溝及びこの周辺からは新しい時期の遺物が出土している。曲輪北西部では、須恵器片が多量に出土し、陣屋の構築時に古墳が破壊されたことが推測できる。曲輪Vの北隅部分は石垣があるが、小さめの石を使っており積み方も新しい。

曲輪Vの西側及び北側には比較的まとまった平坦面があるが、トレンチによる調査では遺構は検出できず、畠等として使用された区画であると考えられる。

曲輪I～Vでは、擾乱等を受けているとはいえ、全体的に曲輪の輪郭が不明瞭であり、また、陣屋の遺構も少ないとから、この跡は臨時のあるいは付属的なものととらえた方が良いのではないだろうか。

(2) 井戸跡 (Fig. 6)

井戸跡は、曲輪Vの南東隅標高20.8mのところに位置している。上部は石組み、下部は素掘りの平面円形の井戸である。法量は直径が上面では1.05m、底面では0.8m、深さは1m、底面より0.35~0.45mまでは素掘りで、岩盤をくり抜いている。その上は大小の自然石を組み合せ石積みを行い、2~5段が残っている。井戸内よりの出土遺物はなかった。

この井戸跡は、比較的浅く湧水は期待しにくい。雨水等を集め貯水するものではなかっただろうか。

(3) その他

曲輪IIの東側斜面に2ヶ所集石がある。

集石1は、斜面南部の標高27~22mにかけ、東西方向に細長く伸びている。幅は2.1~3.5mあり、標高23.5m付近の斜面中央部が広い。

集石2は、曲輪II北東隅から曲輪IIIの方向、標高28~24mの間に細長く伸びている。幅は1.5~3.5mあり、標高が下るにつれ、幅が広くなっている。

集石1・2ともこぶし大の石を主に無造作に積まれており、人頭大の石もときおり混じっている。断面は中央が高いかまばこ形だが、厚さは0.5mを超える所はない。

曲輪Vの北側、標高17mの狭い平坦地に溝状造構がある。溝状造構は、西側崖に沿い、南北方向に伸びる。南側の曲輪

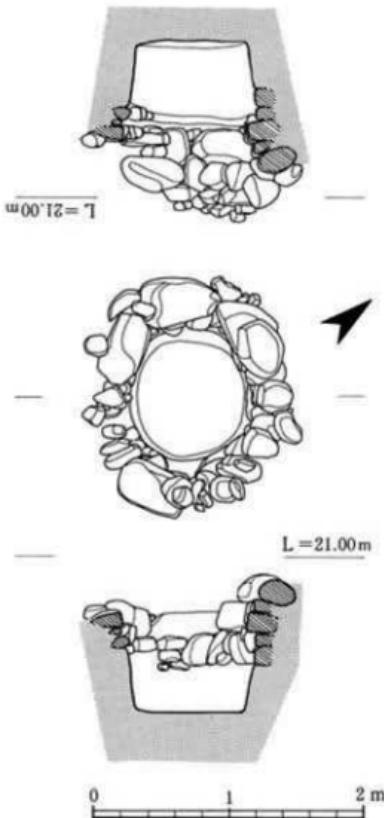


Fig. 6 井戸跡実測図

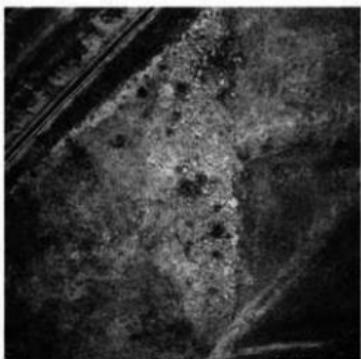


PL. 11 井戸跡全景 (南より)

Vから北へ落ちる斜面から始まり、ここから10.6mまで幅 $2.5\text{ m} + \alpha$ で続くが、その先は確認できていない。深さは、東側平坦面から見て、深いところで1.1mある。溝内からは縄文時代の石器の他、曲輪V北西部で多量に出土した一連の須恵器の流れ込みと考えられる破片が出土している。また、溝状遺構のある平坦面から続く北側斜面で幅 $3.1\sim 5\text{ m}$ 、長さ $8\text{ m} + \alpha$ の礫群を検出しているが、通路として敷き固められた様子ではない。

曲輪V南側の標高24~20mの斜面では、トレンチによる調査であるが、土壤を2基検出している。1基は長さ1.35m、幅0.94m、深さ0.75mの平面不整梢円形、もう1基は長さ1.02m、幅0.92m、深さ0.23mの平面不整方形である。出土遺物は共になく性格は不明である。

この他、遺構には伴わないが丘陵全体から石鎚・スクレイバー等の石器類が出土しており、曲輪V付近で出土した須恵器と共に陣屋構築以前の様子がうかがえる。



PL.12 集石 1



PL.13 溝状遺構(南東より)



PL.14 石組み溝(南より)



PL.15 M地点(加藤陣より)

III 小 結

昭和57年度の調査と合わせ、今回の調査で加藤嘉明陣跡に比定される小丘陵一帯の様子を明らかにできた。曲輪は、丘陵西側尾根を中心に曲輪Ⅰ～Ⅲを配し、東側に狭小な曲輪Ⅳ・Ⅴが取付いている。曲輪Ⅰ～Ⅴでは、石垣・土塁・井戸跡等の遺構があるが、概して少ない。このことは、後世の改変を受けているとはいえ、この陣跡の性格をあらわしているようである。丘陵の最も高所にある曲輪Ⅰは、両側に細長い曲輪を持っているが他の施設ではなく、曲輪Ⅱも東側が石垣の存在が推定されるものの曲輪の輪郭が不明瞭である。曲輪Ⅲは、石垣・土塁により区画され、この陣跡の内で最も意識して造られた曲輪といえる。曲輪内には搅乱により建物跡等は検出できなかったが、丘陵尾根の最先端、加部島との間の海峡を見渡すことのできる絶好の場所に位置することと関連がありそうである。また、曲輪Ⅳは呼子浦に面することから曲輪Ⅲと同様の機能を有すると考えられる。

『秀吉公名護屋御陳之図ニ相添候覺書』¹¹（九州大学文学部九州文化史研究施設古賀文庫所蔵）をはじめとする文書では、加藤左馬之助（嘉明）の陣所を「弁天崎」としている。このことは、この場所が弁天島に近く「弁天」と呼ばれていることからも、陣跡比定の有力な手がかりとなっている。しかし現在知られている、「名護屋古城之図」（鍋島報效会所蔵）等の古図には、この地点に陣屋が描かれているものではなく、加藤陣は徳川家康別陣の南側に描かれている。また名護屋城とその周辺の様子を立体的に描かれたものとして唯一ある「肥前名護屋城図屏風」（佐賀県立博物館蔵）にも、この地点に陣屋は描かれていない。この屏風絵は、名護屋城内の位置関係、背後に描かれた豊臣秀保陣の様子等現況と比較してかなり正確なものとして考えられ、この景観年代を文禄2年（1593）4月から8月の夏にあてはめるのを最適とされている。¹² 加藤嘉明は文禄・慶長の両役とも参加しており、陣屋が屏風絵に描かれて然りである。これらをどう解釈すればよいのであろうか。ただ現存する古図は江戸末期以降のものであり、その多くは「名護屋古城之図」等を次々と転写したものとされ、また古図の原図もわかっていないが、原図の成立は当時や江戸初期まで遡ることはないと考えられている。¹³

発掘調査の結果、遺構の数も少なく曲輪の規模もさほど大きくないところから、大がかりな建物があったとは考え難い。陣屋の主体が別の場所にあり、この地点が付属的な曲輪と位置付けられないだろうか。事実この地点の背後にある標高約45mのM地点では、豊臣秀保陣跡第1陣西腰曲輪の敷石遺構と同様の遺構を検出しており、陣跡があることは確定である。付属的な曲輪とした場合、名護屋浦と呼子浦の出入口かつ加部島との間の海峡に面することから見張所的な役割、この丘陵の北端には「舟着場」と呼ばれる岩場がありまた加藤嘉明が水軍の将でもあることから舟の監視所的役割等が考えられる。ただこの陣跡より規模の小さな陣跡もあり、

検討課題として残る。

また、「肥前名護屋城図屏風」や古図に描かれていないことは、屏風絵景観年代以降の構築・構図上・陣屋の配置変え等を想起できるが、現時点で断定できる要素はない。今後の資料の増加による陣跡と文献・古図等とのより詳細な対比が必要である。

いずれにせよ、加藤嘉明陣跡における今回の調査では、これまで調査を実施してきた豊臣秀保・堀秀治等の陣跡とは違うタイプの陣跡資料を与えてくれている。また陣跡調査では初めての井戸跡も興味深い。井戸跡は比較的浅く貯水施設として使用されたものと考えられるが、伊達政宗の家臣である伊達成実が著した『政宗記』巻八には「家康公利家衆水汲、於名護屋喧嘩事」として、前田利家の家来が12町も離れた徳川家康陣下の清水を汲みに行ったことから双方争い寸前となり、これを政宗が仲裁しその後双方の陣が城の近くに移させられたというものである。陣の配置変えまでに至る程、この地の水不足は深刻な様子がうかがわれ、この井戸跡もそれを伝えているようである。

註

1. 中村質 「史料解題」「特別史跡名護屋城跡並びに陣跡3－文禄・慶長の役城跡図集一」
佐賀県教育委員会 昭和60年
2. 中村質 「<名護屋古城之図>と陣跡図」 註1同書
3. 内藤昌 「<肥前名護屋城図屏風>の建築的考察について」『国華』915 昭和48年
4. 註2と同じ
5. 田平徳栄・多々良友博 「特別史跡名護屋城跡並びに陣跡2」佐賀県教育委員会 昭和58年

特別 名護屋城跡並びに陣跡 5
史跡

—加藤嘉明陣跡発掘調査概報—

発行 佐賀県教育委員会

〒840 佐賀市城内1-1-59

発行日 平成2年3月31日

印刷 西部印刷企画㈱